



ら以下のような意見がよく聞かれます。

「これまで、園庭ビオトープで園児が大きな怪我をしたことはありません。園児は、地面がデコボコしていれば気をつけて歩きます。怪我をするのはたいてい人工的なところで、園児が安全だと気を抜いているところだったりします」

小さい子であっても、危ないところでは慎重になる様子が伺えます。ドイツの園の中には、敢えて危ないところを園庭に設ける園もあります（写真①）。

もう1つは、毒などを持つ動植物による被害です。例えば、次のような生きものが挙げられます。

### 【危ない生きものの例】

- ・スズメバチやアシナガバチ：ハチが飛んできても、騒いだりしてハチを脅かさなければ刺されることはない。ただし、巣が近くにある場合には危険度が増す。ハチを頻繁に見かけるようなら、その後を追うことで園内の巣の有無が確認できる。
- ・イラガの幼虫（写真②）：北海道、本州、四国、九州に生息。7～10月頃にサクラやカエデなどで発生する。不用意にトゲに触ると電撃的な痛みを感じる。痛みは数日で治る。
- ・チャドクガの幼虫：本州、四国、九州に生息。4～9月頃にツバキ科の木で発生する。幼虫の毛に触ると激しい痒み<sup>かゆ</sup>が2～3週間続く。誤って触ってしまったら、こすらず、まず粘着テープなどで付着した毛を取り除く。
- ・オオムカデの仲間：本州以南に生息。初夏から秋にかけて、落ち葉の下などで見られる。咬まれると激痛があり、痛みは1週間以上続くことがある。

その他、蚊の発生を心配される園も見受けます。自然が創出されることで、蚊も暮らし始めます。水辺を設けた場合は、ボウフラを捕食するメダカやトンボの幼虫・ヤゴを生息させることで、水辺からの蚊の発生はほぼ抑えられます。その他、草丈の短い明るい環境を維持するなどが考えられます。

園庭ビオトープに訪れる危ない生きものは、それほど多くありません。その見分け方や危なさの度合い、被害に遭った時の対処の仕方などを覚えておけば、安心して園児を見守ることができます。

### 危ないことを教える

園児に、自然の中での危ないことを教える方法の一例をご紹介します。

例えば、園庭でイラガの幼虫を見つけた時、皆さんはどのような行動を選択しますか。

（行動1）園児が見つめる前に取り除く。

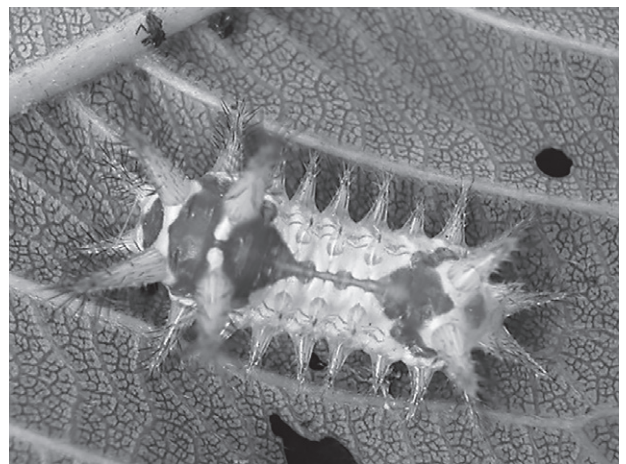
（行動2）園児と一緒に安全な距離で観察し、その後、園児が刺されないように取り除く。

（行動3）園児と一緒に安全な距離で観察した後、引き続き、園児が観察できるようにそのまましておく。

国内の園庭ビオトープの設置園には、（行動3）を選択した園があります。

イラガの幼虫の場合、子どもが触らなければ問題はないので、園児への説明など安全管理を徹底し、そのままにしているとのこと。その後の園児の様子を聞くと、イラガの幼虫に興味津々に観察していて、刺された子はいないとのこと。時には、夕方お迎えに来た保護者に「このみどり色の虫はさわっちゃだめなんだよ。さわるといたいんだよ」と、誇らしげに説明をしている様子が見られるとのことでした。

写真②





# 自然が持つ 保育力を 生かす

3

## 園庭ビオトープでの安全管理

田邊龍太

Ryota TANABE

(公財) 日本生態系協会教育研究センター長

### 必要性と危なさを天秤にかけて

「園庭ビオトープでの怪我や、蚊・危険な生きものについて園としての対策は?」「心配する保護者への説明は?」これらは、保育者からよく寄せられる質問です。保育者として、園児の怪我や事故はとも気になるところです。

園庭ビオトープを導入するにあたっての不安を、以前、ドイツの園庭ビオトープの設置園に質問したところ、次のような答えが返ってきました。

「車を例に考えてみてください。私たちが車を利用する中で、年間多くの方が怪我をしたり、亡くなったりしています。それでも、車の利用がなくならないのは、私たちの暮らしにとって、車が欠かせないものだからです。私たちは、子どもが交通事故に遭わないように、小さい頃から交通ルールを教えます。

自然も同じです。自然との触れ合いが子どもの健全な発達に欠かせない中で、自然と安全に触れ合うことができるよう、私たちは園児に自然の中での危ないことを丁寧に教えていく必要があります。そのために、まず保育者が自然の中での安全管理を学んでいます」

園庭ビオトープを導入するか否かは、子どもにとっての自然との触れ合いの必要性と危なさを天秤にかけて、検討していくこととなります。保育者間で話し合い、また、保護者への丁寧な説明も必要でしょう。その時に、保育所保育指針の解説にある、「安

写真①



全を気にするあまり過保護や過介入になってしまえば、かえって子どもに危険を避ける能力が育たず、怪我が多くなることがあるということにも留意することが必要である」という観点が大切になります。

### 安全管理の考え方

園庭ビオトープは、地域の自然に比べて、安全管理がしやすいという利点があります。年間を通じて向き合う中で、例えば「6月になると、このツバキの木にチャドクガの幼虫が発生しやすい」といったように状況が把握でき、季節ごとに危ないことを予測しやすくなります。その予測のうえで、事前に安全確認をするポイントや、保育者の園児を見守る配置などを具体的に考えることができます。

園庭ビオトープでの危ないことは、大きく2つ挙げられます。

1つは怪我です。ころんだり、落ちたり、トゲが刺さったりなどが考えられます。この点については、ドイツや日本の園庭ビオトープの設置園の保育者が